
機械オタク、魔法界に参上！

RAB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械オタク、魔法界に参上！

【Nコード】

N2482V

【作者名】

RAB

【あらすじ】

前世が機械オタクの人間が、今世でも機械と触れ合いたいと願う。

しかし、純血主義の家に生まれたためマグル界と関わられる機会が少ない……

だが、そんなことでは諦められない！！

そんな男の生き様を描く物語。

0 プロローグ（前書き）

映画の影響で書き始めました。

できる限りがんばります。

8/3 独自設定としてホグワーツ内でも危険物でなければ、マグル製品が使えることにします！！

0 プロローグ

俺は前世の記憶がある。

そんなことをいきなり言われたら、周りは俺が狂ったとしか思わな
いだろう。

しかし、これは俺にとっての真実。

まあ、もちろん誰にも話したことなんてない。

そんなこと言ったってどうにもならないだろう？

むしろマイナス面ばかりだろ。

そんな俺は前世では俗に言う「機械オタク」だった。

俺は機械がないと生きていけない……

そのくらい機械が俺の人生の一部だったんだ。

だというのに……だというのに……

俺は「魔法族」に転生してしまったのだ!!

しかもあの児童書“ハリーポッター”の世界の!!

しかもとても有名な純血主義の一族の末裔……

父は俺が生まれる前に亡くなり、母は俺を産んだ時に亡くなった。

その結果、俺の保護者はなんとあの純血主義で有名なルシウス
マルフォイ……

これは俺にもう機械と関わるなっという事なのか？

いや、そんなの俺に耐えられるはずがない！！

ならばどうするか？

もちろん、純血主義を無視して機械と触れ合うのさ！

そして、マグルたちと友達になり機械を扱う機会を増やすのさ！

マルフォイ家？

そんなの俺の知ったことじゃない。

純血主義の一族？

はっつ。もう俺しかいねえんだからどうでもいいぜ。

原作？

俺は機械があれば生きていける。

例え先祖があの手ザール スリザリンドろうと俺はスリザリン
寮以外に入りマグルの友達を作るんだ！！

0 プロローグ（後書き）

やっぱり文章書くのって難しいです……

1 カミングアウト(前書き)

今まで書いてた小説と少し違う感じなので難しいです……

1 カミングアウト

「ああ、なんて素晴らしい技術力なんだ……この美しいフォルム、この眩い輝き、この滑らかな手触り……マグルはなんて素晴らしいんだ！俺、魔法族やめてマグル界に移ろうかな？その方が良いよね！絶対にその方が良いよね！！なあ、ドラコ！！」

「だから、その考えをいいかげん改めろよ！！そんなガラクタの何処が良いんだよ！しかも穢れた血の世界に行きたいだって？君、頭がおかしいんじゃないのか？」

将来絶対に剥げそうな髪型の従兄弟、ドラコ　マルフォイはありえない物を見るような目で俺を見てくる。

実際に純血主義の家に生まれ、その考えを教えられ続けたら、こうなるのも仕方ないだろう。

しかし、俺は違う。

いつの頃からだろうか、俺に前世の記憶が蘇り出したのは……

確か、4歳くらいだっただろうか？

初めて家を一人で抜け出し、マグルの世界で迷子になったのだ。

その時に俺は今世で初めて電気で動く機械を見たんだ。

その瞬間かな？俺に記憶が蘇ったのは……

それから俺のマグル好きが始まったんだ。

ドラコはまだぐちぐち言っている。

長い付き合いなのだから、俺のマグル好きが今更改められるはずがないことぐらい分かっているだろうに…

「そーいえば明日だよな。ダイアゴン横丁にホグワーツに入学するのに必要な物買いに行くの。いよいよ俺たちも入学かぁー……どの寮になるかな？」

「君はバカか……僕たちがスリザリンじゃなくてどうするんだよ。特に君はスリザリン家の末裔なのだから。」

ドラコは呆れながら言った。

「ふっつ……そこで期待に答えず他寮に入るのが俺さー!!どんな手を使ってもマグル生まれがいる寮に入つてやる!!」

「そんなことを言っている時点で君はスリザリンさ……はぁ、なんでこんな奴が我らが崇拜するサラザール　スリザリンの子孫なんだろう……」

ドラコは若干涙ぐみながら呟く。

もちろん俺はスルーだ。

「頼むから……本当に頼むから、スリザリン家にふさわしい振る舞いをしてくれ……僕が君の尻拭いをしなくちゃいけなくなるだろう

……」

「あーわかったわかった。んじゃ俺マグルの街に行くからルシウスさんに伝えといて。」

「はっっ!？」

俺は部屋の壁に立てかけていた箒を掴み窓の外へジャンプした。

「じゃ、また明日な、ドラコ。ばーい!！」

「まで!!!シモン!!!マグルの街なんかに行くなっっ!！」

俺は叫ぶドラコの声をBGMに優雅に空を飛んで行った。

しばらく空を飛んでいると、マグルの街が見えて来た。

俺はマグルたちに見られないように森の中で箒から降りた。

中々発達した街で、中心街はとても栄えていた。

俺は目的の電気屋に行く。

そこで俺はゲームコーナーに向かった。

そう。今日の俺の目的はこれだ。

俺は機械を魔法界でも使えるように、独自で魔法を開発した。

その結果、今のところ、電気さえあれば動く機械を魔法界でもつかえるようになったのだ。

最終的な目標は、マグル界なみに機械を使えるようにすることである。

今日ゲームを買う理由は、携帯できるタイプのゲームならばホグワーツでも使えるからだ。

俺の屋敷には今ではたくさんの機械がある。

しかし、ホグワーツに持って行ける物は限られている。

俺は機械がないと生きていけないと自負している。

だから、持って行ける機械を増やしに来たのだ。

しかもゲームならば、暇な時間を有効的に使えるしな。

俺はとりあえず、新作コーナーにある全てのゲームを買った。

早くプレイしてみたいが、ホグワーツに入学するまで我慢だ。

「あー…早く入学してーなあ……………」

俺は行きと同じように、マグルに見られないような場所で筭に乗り屋敷へと帰って行った。

1 カミングアウト（後書き）

残念な感じの文章ですみません（>人< ;）

2 主人公との対面（前書き）

前期課外が終わったー！！

嬉しすぎます（ ）（ ）

2 主人公との対面

ピピピピピーッッ!!

マグル製の目覚ましの音が鳴り響く。

俺は手探りで目覚ましを見つけ、スイッチを切ってから2度寝をした。

しばらくして時計を覗き込むとまだ9時15分。

マルフォイ家との待ち合わせ時間は9時だ。

……………あれ？時間すぎてね…？

ドドーン!!

1階の談話室から大きな音が聞こえる。

談話室といえば、暖炉。暖炉といえば、煙突ネットワーク…………

「シモンー!!待ち合わせ時間はとっくにすぎてるぞー!どうせ君のことだから、寝坊でもしたんだろ…………さっさと準備しろよっ」

ハゲ頭のドラコの声が響く。

いや、まだハゲてはいなかったな…………

「すまん、すまん。今から準備するよ…………」

俺は手早く準備をし、談話室へと行った。

「全く君は……少しくらい気をつけたらどうだ？いつもみたい僕
だけならまだしも、今日は父上と母上もいるんだぞ！だいたい
「すまんすまん、次は気をつけるよ。」……」

ドラコはまだ不満を言い足りないようだったが、そんなの全て聞いていたら、日が暮れてしまうと判断した俺は、早々にドラコの愚痴を切り上げた。

俺は暖炉の近くに置いてあるフルーパウダーを一掴み取ると

「マルフォイ邸！！」

と叫んだ。

何度やつても好きになれない浮遊感を感じたあと、目の前に広がっていたのは見慣れたマルフォイ邸だった。

俺に続いてドラコも暖炉から出てくる。

「おはようございます、ルシウスさん、ナルシッサさん。約束の時間に遅れてすみません。」

「ああ、おはよう、シモン君。全く君はいつも遅れるのだね……」
ルシウスさんはすでに呆れ顔だ。

俺に何を言っても意味がないと感じているのだろう。

今まで主にマグル関係で散々俺に文句を言って来たが、俺は聞いた試しがないしな。

だが、今回のように俺に非がある時は俺もちゃんと聞くのにな……

「本当にすみません……」

俺はもう一度謝った。

マルフォイ家の方々は意外そうな目で俺を見てくる。

こいつら、俺のことどんな奴だと思ってんだよ……

俺だってさすがに常識くらい持ち合わせているぞ……

俺はついついジト目でマルフォイ家を見てしまった。

「ゴホンッッ……では、ダイアゴン横丁に行くとするか！」

そう言ったルシウスさんの言葉に皆はしたがった。

ダイアゴン横丁は数年前と同じくらい活発だった。

いや、ホグワーツ生が学用品を買いに来ているから前に来たときよりも賑わっているかな……

俺の久しぶりのダイアゴン横丁での感想はそれだけだった。

俺は主に通販を利用している。

だからあまりダイアゴン横丁には来ないのだ。

マグルの街にはよく行くけどな。

最後に来たときは確か自分の杖を買ったときかな？

「お前たちはさきに制服を仕立てに行きなさい。教科書は私たちが買っておくから。」

俺はルシウスさんの言葉に甘えることにした。

全部自分で買うのは面倒だしな。

俺とドラコはマダム・マルキンの洋装店へと向かった。

あれ？そーいえば原作ではここでハリーとドラコの初対面だよなー

……

俺その場面にいていいのか？

いや、スリザリン家の末裔とか、原作にいなかったイレギュラーがいる時点でもう変っているか……

俺は自分をそう納得させた。

店の中に入ると、俺たち以外の客はいなかった。

「坊っちゃん方、今年ホグワーツに入学かい？」

「はい。なので、制服の仕立てをお願いします。」

「わかりました。では、この踏み台の上に乗ってください。」

俺とドラコは言われた通り踏み台の上に乗る。

するとマダムは俺とドラコの採寸を始めた。

先に俺の採寸が終わり、俺は店の外でドラコを待つことにした。

外に出るとき、丸い眼鏡で癖っ毛の少年とすれちがった。

あつ……………ハリー　ポッターだ……………

俺は物語の主人公を見たことに少し感動した。

しばらくすると、店からハリーが出て来た。

「……………彼がすまなかったな……………あいつ、ちょっと偉そうだっただろ？」

一応、幼馴染として謝っておく。

ドラコのせいで、主人公やマグルたちから嫌われるのは勘弁してほしいからね。

こういう所でポイント稼がなきゃな。

俺の打算的な考えにハリーは気づかず

「君が謝ることじゃないよ……君も今年入学なの？」

と言った。

どうやら、少しはプラスのイメージがついたらしい。

「ああ。そういう君もだろ？俺はシモン。君は？」

「僕はハリー…ハリー　ポッターだよ。」

少し戸惑いがちに自分の名前を言うハリー。

たぶん、俺も他の人たちみたいに騒ぎだすかもって思っているんだろうな。

「へえーあのハリー　ポッターかあ……」

俺のリアクションが思ったよりも小さかったことにハリーは驚いているようだ。

まあ、俺は最初からハリーだっと思ってしていたしな。

「まあ、ホグワーツではよろしくな、ハリー。」

「あっうん！こっちこそよろしくね、シモン。」

そう言っつてハリーはハグリットの方へ走って行った。

するとタイミングよくドラコが店から出て来た。

「遅かったな、ドラコ。」

「ああ、なぜか僕のだけ時間がかかったみたいだ。もう父上たちが待っているだろう……早く行こう。」

その後俺たちは残りの買い物をして屋敷へ帰った。

「あー疲れた……早く寝よう……」

俺は着替えて自分に清めの呪文をかけ、まだ早いが寝ることにした。

2 主人公との対面（後書き）

前回よりも長く書けたかな……

あいかわらず、クオリティは低いけど……

7 / 3 1 修正しました。

3 汽車での旅（前書き）

あー……

夏休みって素晴らしい！！

3 汽車での旅

ザワザワザワ……

酷い人混みの中、俺は沢山の荷物をカートに乗せ歩いていた。

そう、ここはキングズ・クロスだ。

つまり、いよいよホグワーツ入学の日がやってきたのだ！！

ついでに、今日はマルフォイ家の方々とは来ていない。

もちろん、ドラコには一緒に行こうと誘われたが

「お前の手下その一、その二と同じコンパートメントは、密度が高すぎてムリ！！」

と言って、きつぱりと断った。

それ以外の理由としては、同じコンパートメントになったら、ハリーにさらに嫌われるあの場面に遭遇する確率が上がるということかな。

今日は目覚ましを何個もかけ、いつもより早く起きたので、余裕を持って駅に着くことができた。

そのおかげで、コンパートメントは楽に確保することができた。

只今の時間は10時30分。出発まであと30分もある。

俺は早速、マグル界で買ったゲームをすることにした。

やはり、マグル製の機械は素晴らしい……………

俺は夢中になってゲームをプレイした。

「おっつ　このコンパートメント1人しかないぜ！他はいつぱいだし、ここに入れてもらおーぜ、フレッド！！」

「そーしよう！俺、リーを呼んでくるな！！」

何か大きな声が外から聞こえた気がする。

しかし、今、俺の神経の全てはゲームに注がれている！！

「一緒にコンパートメント入れてもらってもいいか？他のコンパートメントはいつぱいでさー」

ピコピコバキューン……………ピコピコ……………

「おーい、聞こえてるかー？」

ピコピコ……………ドンドンシッ……………ピコピコ……………

「おいつつ！！人の話を聞けよっつー！」

ピッッ……………ダダダーン……………

俺の目の前にゲームオーバーという文字が広がる……………

「くそっつ！お前のせいだぞ！！お前のせいで……お前のせいで……
…アルスは死んだんだ！！」

「は！？」

「お前が俺に話しかけてなんかこなければアルスは生きてたんだ！
どーしてくれるんだよ！？」

俺の言葉に俺に話しかけて来た少年は酷く動揺している。

「いついや、俺はただ、コンパートメントの相席を頼もうとしただけ……」

「そんなのかつてに座つとけよ！……全く、ゴールドが半分になっちまったじゃねーか……」

「えっ……？ゴールド……？」

少年は何がなんだか分からないようだ。

俺は親切にも、この少年がどんなに大きなことをしでかしたのか教えてあげることにした。

「……あははははっつ、アルスってマグルのゲームのキャラかよ！
！君、面白いなっつ　　というか、ゲームオーバーは俺のせいじゃなくて自分のせいだろ！ほんと、面白い！」

「いや、どう考えてもお前のせいだね！というか、お前誰？」

「ああ、自己紹介がまだだったね。俺の名前はジョージ。ジョージ
ウィーズリーさ。」

ジョージ ウィーズリーだと？たしか原作に出てたよな……？

それよりも！重要なのはあのウィーズリー家ということだ！！

「ということは……先輩はあのアーサー ウィーズリーさんのご
子息なんですね……いいなあーお近づきになりたいです……！！」

「へっ……？あ、いや、たしかにそうだけど……なんか、さっきまで
と別人じゃないか……？というか、あのってなんだよ？」

「アーサーさんは僕の心の師匠なんです……！ぜひぜひ今度紹介して
ください……！」

そう。俺は心の底からアーサーさんを尊敬している。

血を裏切る者と罵倒されてもマグルを愛し続けているあの姿に……！

「えっ……あつあつ分かったよ。それより君の名前は？あとその口
調は君がするとなんだか気持ち悪いから辞めたほうがいいと思う。」

なんて失礼な奴なんだ……！！

アーサーさんのご子息だから、敬意を払ったというのに……！

これからは、アーサーさんだけに敬意を払うことにしよう。

「……んじゃ辞めるよ。俺はシモンだ。絶対にアーサーさんに紹介

してくれよ!」

念を押してもう一度言つと、ジョージは若干引き気味に頷いた。

ガラッ

コンパートメントの扉が開く。

「お邪魔しまーす!」

中に入って来たのはジョージと同じ顔……つまり、フレッドと予想される少年とドレッドヘアの、このメンツからリーと予想される少年が入ってきた。

「あつ、紹介するな!見ての通り俺と双子のフレッドとこっちのドレッド頭はリーだ!こいつらも相席させてもらってもいいか?」

「ああ、いいよ。俺はシモンだ。よろしくな。」

それから俺たちは他愛のない話をした。

途中、リーが、でっかいタランチュラで脅かしてきたが、もちろん仕返しはさせてもらった。

「そーいえば、シモンは新入生だよな?どこの寮に入りたいんだ?」

「スリザリン以外!」

俺は即答で答えた。

あまりの早さに三人はビックリした。

「へえー……やっぱマグル生まれにスリザリンはきついからなー……」

「え？俺、マグル生まれじゃないけど……？というか、マグル生まれだったらアーサーさんのこと知らないだろ。」

俺はジョージにそう言い返す。

ジョージは あっそうか！ というような表情を浮かべた。

「いやあ、そんな高度のマグルのゲームをあんなに夢中でやってたからさ。マグル生まれだと思い込んでたわ。んじゃ、純血主義が嫌いなんだな。」

「もちろんだよ！あんな素晴らしい技術を持っているマグルを毛嫌いするなんておかしいよ！！俺の保護者が純血主義で俺の一族が純血主義だろうと俺は純血主義なんてありえないって思ってるし！」

「そりゃあ大変だな。しかも一族が純血主義ってことはほとんど全員がスリザリン生だっただろうしな。頑張れよー！！組み分け、グリフィンドールに来たら歓迎してやるよ！」

「その時はよろしくなー！！」

コンコン

「どーぞ。」

「お前たち、もうすぐホグワーツだぞ。さっさと着替えるよ。」
どうやら、隣のコンパートメントの人が親切に伝えに来てくれたようだ。

「サンキュー！よし、着替えるか。」

俺たちはホグワーツの制服に着替えた。

俺の体より少し大きい制服。

マダム　マルキンが体の成長も考えて作ってくれたのだろう。

着替え終わると、ちょうど駅に着いたようだ。

「新入生は俺たちと違う道だから、ここでお別れだな。じゃあ、君がグリフィンドールになるのを期待してくよ！」

「ああ、またな！」

俺は三人が行った後、ハグリットがいる方へと向かった。

……いよいよ、運命の組み分けだな………何としてもスリザリン以外になるぞ！！

俺はそう心に刻んだ。

3 汽車での旅（後書き）

はふー……

語彙が少ない私は文章書くのが大変です 汗

8 / 1 一人称修正。

7 / 3 1 修正しました。

4 ホグワーツ入学（前書き）

何時の間にか、日間ランキングに入っていました！

これも皆さんのおかげです） ・ ・ ・ （ノ

本当にありがとうございます！！！！

4 ホグワーツ入学

新入生たちは皆、ハグリットに続いて険しくて狭い小道を歩いて行く。

もちろん俺も新入生なので、その中の1人だ。

しばらく歩いていくと、前の方が騒がしくなった。

俺たち、最後尾も続いて騒がしくなる。

……………ホグワーツだ……………

確かに、キラキラしていて、とても幻想的だ。

しかし俺には、あの沢山の技術が集まってできた機械の方が美しく見える。

そんなことを思っていると、皆が続々とボートに乗りだした。

俺は、少し出遅れたせいで、ドラコとその手下たちと同じボートになっってしまった。

……………これ、沈むんじゃないか? ……いや、ハグリットが乗っているボートも沈んでいないのだからたぶん大丈夫だろう。……………たぶん……………

「シモン、さっさと乗れよ。君のせいで遅れたらどうするんだ?」

どうやら、ドラコはこのボートが沈むかもしれないという可能性に

気づいていないようだ。

「あ…ああ、すまん。今乗るよ。」

俺は、覚悟を決めてボートに乗り込んだ。

周りのボートと見比べると、若干俺たちのボートは沈んでいるような気がする…

俺は、気のせいだとして片付けた。

「みんな乗ったか？」

ハグリットが全員乗ったか確認する。

「よーし、では、進めえ！」

ハグリットがそう叫ぶとボート船団は一斉に動き出した。

……… なんとか、沈まずにホグワーツに着くことができた………

俺は、深く神に感謝した。

ハグリットが城の扉を3回叩くと、扉が開いた。

中にはマクゴナガル先生と思われる女性がいた。

玄関ホールは、さすがホグワーツ。

とても広い。

「ホグワーツ入学おめでとう。」

マクゴナガルはそう言ったあと、組分けについて説明しだした。

俺は、内容を知っているので、半分以上聞き流した。

マクゴナガルが部屋を出て行ったあと、新入生たちは不安をあらわにした。

というか、俺はどうしようかな、寮………

スリザリン以外なら何処でも良いって思ってきたけど、やっぱり明確に何処の寮が良いっていうのを決めていた方がその寮になりやすい気がする。

つまり、スリザリン寮になりにくくなるかもしれないという事だ。

やっぱり、グリフィンドールかな………

あの双子とリーとは仲良くなれた気もするし。

あつても、深く原作に関わりすぎるのはめんどいかも……

んじゃ、レイブンクローか？

いや、俺あんまり魔法関係の勉強は好きじゃないしな。

よしっ！ハツフルパフだな！！

原作でたしかマグル生まれの子がいたし。

決定決定！！

俺の考えがまとまると、ちょうど良く、マクゴナガルが新入生を呼びにきた。

「さあ、一列になって。ついてきてください。」

マクゴナガルの言葉に従い、皆、大広間に入って行く。

全員が中に入ると、マクゴナガルが組分け帽子を用意した。

組分け帽子は想像以上にボロかった……

組分け帽子に全員の視線が集まると、組分け帽子は歌いだした。

私はきれいじゃないけれど

人は見かけによらぬもの

私をしのぐ賢い帽子

あるなら私は身を引こう

山高帽子は真つ黒だ

シルクハットはすらりと高い

私はホグワーツ組分け帽子

私は彼らの上をいく

君の頭に隠れたものを

組分け帽子はお見通し

かぶれば君に教えよう

君が行くべき寮の名を

~~~~~

俺は組分け帽子の歌を聞きながら思った。

俺はハツフルパフにピッタリだと！

俺は自分の心には正しく忠実で、自分の生きがいのための苦勞なら苦勞と思わないからだ。

組分け帽子が歌い終わると、広間にいた全員が拍手喝采をした。

その後、マクゴナガルがABC順に組分けされる子の名前を呼んでいった。

俺は“S”なので結構うしろのほうだ。

原作キャラの組分けは、原作通りだった。

ドラコの組分けの早さには笑ってしまった。

そして、いよいよ俺の番……………

「スリザリン・M・シモン！」

俺の名前にハリーの組分けの時並みに囁き声が広がる。

大方、俺の家名に驚いているんだろう。

俺は、マルフォイ家が俺のマグル好きがばれないように、社交界などに出さなかつたため、俺がスリザリン家の末裔ってことをドラコたち以外に知られていなかっただのだ。

まあ、社交界に出るより、家で機械をいじっている方が何百倍も楽しいから助かつたけどな。

組分け帽子をかぶった瞬間俺は

(ハツフルパフ！ハツフルパフ！)

と心の中で叫んだ。

(いや、君はどう考えてもスリザリンだろう……家柄はもちろん、君の本質なんて、スリザリン生そのものだ。)

(!?!?……何を言っているんだ!!俺ほど自分の心に正しく忠実で自分の生きがいのための苦勞なら苦勞と思わない奴なんていないだろう!俺はハツフルパフにふさわしい!!)

(いやいや、それは正しく忠実で苦勞を苦勞と思わないというより、自己中心的なだけで、君は全くハツフルパフに向いておらん。)

(ちっ……じゃあ、グリフィンドールで!!)

(……君は、勇猛果敢な騎士道とは無縁の人間であろう……)

(レイブンクローはっっ!?俺、興味があるものについての意欲は人一倍あるし!!)

(ふーむ……たしかに。しかし君に向いているのは…)

「スリッツ

(まてまてまてーっ！くそっ……どうすればスリザリン寮以外の寮になれる？こうなったら インペリ……いかんいかん、アズカバンに行ったら機械に触れなくなる……ならば、組分け帽子！燃やされたくな……)

…スリザリン！！」

バシツツ

俺はそう叫ばれた瞬間、つい組分け帽子を床に叩きつけてしまった。

「何をしてるのですか！？Mr.スリザリン！さっさと席に座りなさい……！」

周りを見渡すと俺がなぜ、組分け帽子を床に叩きつけたのか分からないという表情をほとんどの人が浮かべていた。

まあ、ファミリーネーム的にスリザリン寮になるのが当たり前と思われていたのだろう。

例外は、ドラコと双子とリーだけだ。

ドラコは やっぱりな という表情で、双子とリーは笑いを堪えています！というような表情だ。

とりあえず、俺はしぶしぶスリザリン寮の席に着いた。

くそっつ！計画が狂ってしまった……

どうやったたら、スリザリン寮の生徒でスリザリン家の末裔として広まった俺がマグル生まれたちと仲良くなれる？

このままでは無理だろう……

スリザリン家の名前により、マグル生まれ……というより、スリザリン生以外は俺のことを敬遠しだすだろう。

……仕方ない……計画の練り直しだ……

俺は、残りの組分けとダンブルドアの話の間ずっと新たな計画を立てていた。

#### 4 ホグワーツ入学（後書き）

主人公がスリザリン寮以外に入ることをご期待していただいた方々、  
本当にすみません！！

主人公の性格てきにどうやってもスリザリン寮以外は無理だったの  
で……

8 / 1 主人公の名前変更。……ミドルネームって難しい……

8 / 2 主人公の名前再度変更。

8 / 3 主人公の名前再々度変更。

皆さんにお聞きしたいのですが、ハリポタでは公式の場でファミリ  
ーネームとファーストネームどちらが先なのでしょう???

どちらの意見もお聞きし、決めかねているので、ぜひ教えて下さい  
！！

## 5 愉快的魔法薬学(前書き)

びっくりです！

なんと日間ランキング上位にランクイン……………

信じられません)( )( )。。( )( )( )( )( )( )

皆さんのおかげです！

本当にありがとうございました！！

## 5 愉快的な魔法薬学

宴が終わり就寝時間になると各寮の監督生がそれぞれの寮へと引率していく。

スリザリן寮は地下にあった。

部屋割りを見ると、運良く一人部屋！……なんてことはなく、ドラコと二人部屋だった。

まあ、それでも運が良い方だろう。

俺は自分の部屋に着くと、早速買ったゲームを取り出した。

いそいそとそれらを整理していると、ドラコが　うげえー　と　　というような表情でこっちを見ている。

ついでに、ゲームは俺の鞆の1/4を占めている。

残りの3/4は衣類、教科書、機械の工具などだ。

「シモン、先に言っておくが、そんなマグル共が作った物を外で使うなよ。」

「はっつ？何言ってるの、ドラコ。コレは携帯用のゲームで、何処にでも持っていけることが特徴なんだよ。それなのに、その特徴を生かさなくてどうするのさ。」

「僕たちが尊敬するサラザール　スリザリןの子孫がそんな物を

使っているなんて知られたらどうするんだ！？君は偉大な血を引く人間なんだぞ！好い加減理解してくれ！！」

ドラコは普段とても青白い顔を真っ赤にしながら叫ぶ。

「そんなの俺に関係ないじゃん。俺は偉大な血より機械の方が何百倍も大事なの！！」

「ああ、そんなのとっくの昔に理解している。だが、僕たちには大事なことなんだ！頼む。この部屋ではいくらでもやっていいから……」

ドラコのあまりの必死さにびっくりだ。

純血主義ってこんなに大事なことなのか？

俺には理解できん。

いつもの数倍口煩いドラコについて負け、俺はしぶしぶ了承した。

「分かってくれたのか、シモン！！」

「ああ、分かった分かった。でもこの部屋ではいくらでもやっていいんだよな？」

「もちろんさ。君が外でそれを使わないなら。」

俺はドラコのその言葉についてニヤリとしてしまう。

「んじゃ俺、今から数日間ここに籠ってずっとゲームする！授業に

も出ずに！ああ、なんて素晴らしいんだ！機械にずっと触れられる毎日！！先生に宜しく伝えておいてくれ！」

ドラコはポカンとしている。

俺はそんなドラコをよそにゲームを始めようとした。

「ちょっと待て！そんなの許されるわけがないだろ！僕たち今日入学したんだぞ！何早速サボろうとしているんだ！！というか、食事だつてどうする！？」

ドラコがキーキー叫ぶ。

はつきり言つて、近所迷惑だ。

「煩いなー。お前が良いつて言つたんだろ。授業はあれだ、病欠とでもしておいてくれ。俺、実は病弱だし。このままだと週に一日くらいしか学校行けないみたいの設定にしてくれると嬉しい！食事はお前が運べばいいだろ。」

「君が病弱なんて聞いたことないぞ！！というか、そんな設定はあり得ないだろ！そこまで酷いなら入院しろってことになるだろ！食事を運べつて？なんで僕が！？僕は君のパシリじゃないぞ！！」

全く……

俺が神聖なるゲームを始めようとしているのに……

煩すぎる。

「……俺が外でゲームしていいのか？」

「ダメに決まっているだろう!!」

「んじゃ、言われた通りにしろよ。これ以上煩くしたら、今すぐ談話室でゲームすんぞ。」

ドラコは嫌そうな顔をしながら黙った。

はあ。やっとゲームができる。

俺はゲームの世界へと入って行った。

この数日、ドラコは言われた通りにしている。

俺は楽しんでゲームができ大満足だ。

ゲームを一日中やり続けられる毎日。

ああ、なんて素晴らしい日々なんだ！！

そんなことを考えていると、ドラコが慌てて部屋に入ってきた。

「シモン！頼むから次の授業にもは出てくれ！寮監のスネイプ教授の授業なんだ！出ないと大変なことになるぞ！」

ふーむ……確かに。

寮監と揉めるのは面倒なことになりそうだ。

しかも、陰険そうだしな。

まあ、十分ゲームも堪能したし、初授業行きますか！

「ああ、わかった。今準備するよ。」

ドラコはあからさまにホツとした表情を浮かべた。

準備を終え、魔法薬学の教室に行く。

中に入ると、ハリーたちを見かけた。

あれ？これって、原作じゃん。

俺は今更思い出した。

俺はドラコとスリザリン生が集まっている席に座る。

すると、他のスリザリン生たちから

「大丈夫？病気なんだって？」

など心配の言葉を貰った。

そーいえば俺、仮病使ってたわ。

俺はすぐに思い出し、それらしい対応をとる。

ドラコからジト目で見られた。

しばらくすると、スネイプが教室に入ってきて、出席を取り始める。

まずは、スリザリン生からだ。

俺は出席を取られたあと急に眠気に襲われた。

あー……そーいえばここ数日徹夜でゲームしてたや……

俺はあまりの眠気に逆らうことを諦め、夢の世界に旅立つことにした。

「モンッッ！シモン！！起きろっっ！！」

「……んー」

ドラコの声により現実に戻された俺は、まだブーツとしている頭を上げ周りを見渡す。

教室にいる全員が俺のことをガン見している。

スネイプは額に青筋を浮かべ、ハリーは立たされている。

あー…原作のあの場面かあー

意外と長く寝てなかったなあ。

俺がそんな場違いなことを考えていると、スネイプが俺に話しかけてきた。

「…君は、今まで具合が悪く、ずっと部屋で寝ていたのではないのかね？……どうして今寝ている？まあ、話はあとで詳しく聞こう。ポッターも座れ。今からおできを治す薬を調合する。二人一組になつて始めろ！」

グリフィンドール生は、寝ていたのに減点されないことに不満を感じているようだ。

まあ、仕方ないだろう……

しかし、これで絶対俺のグリフィンドールでの評価が下がった！

くそっ……スネイプめっっ

俺のマグルと仲良くなる計画を邪魔しやがって!!

俺は寝ていた自分が一番悪いのに、全てスネイプのせいにして片付けた。

おできを治す薬はドラコと調合した。

……正確には、ドラコに押し付けた。

まあ、ドラコも嬉しいだろう!

スネイプに褒められる機会が増えるのだから!!

そんなことを考えていると、向こうから

「バカ者!」

という叫び声が聞こえてきた。

どうやら、ネビルが調合に失敗したらしい。

あつたなー……こんなシーン。

それから、ネビルは医務室に送られ、ハリーは理不尽な減点をされ、俺の初授業は終わった。

さあ帰ろう!

とすると、スネイプに呼び止められた……

「さて、君は、どうしてさっき寝ていたのか教えて貰おうか。」

「あー……それはですね、あれは寝ていたのではなく、具合が悪くなり、少し伏せていただけですよ。」

「ほう。あれが寝ていたわけではないと？しかも、全く具合が悪そうには見えないが？」

「はい！！今はもうすっかり良くなりましたから！！！！」

俺は、いつもの数倍キラキラさせた笑顔を浮かべた。

スネイプは、信じてはいないだろうが、これ以上このやりとりを続けても無意味だと感じたのか、俺を解放してくれた。

帰り際に

「次はないぞ。」

としかめ面で言われたが。

俺は華麗にスルーし、自室でまたゲームに励むことにした。

## 5 愉快的魔法薬学（後書き）

うーん…ドラコの扱い酷かったかな？

でも、私のこの作品でのドラコのイメージは、いつも主人公に振り回される苦労少年なんですよね……



## 6 グリフィンドール生

あの魔法薬学の授業から数日、さすがの俺も授業に出る気になり、久しぶりにドラコたちと朝食を取りに行くことにした。

まあ、持ってきたゲームのほとんどを全クリしてしまったことが主な原因だが…

しかし、俺は寮を出てすぐにドラコたちと朝食にきたことを後悔した。

なぜなら、他寮からの視線が痛いのだ。

全くこいつは……入学してまだ間もないというのに、よくこんなに嫌われることができるな……

こんなことを思っていることがドラコにバレたらきつとこいつ思うに違いない。

入学した次の日からサボりまくる奴よりましだと。

ついでに、先生たちにはとくに仮病だとバレているようで、シモンは要注意人物として先生たちにチェックされている。

しかし、明確な証拠がないので、シモンは罰せられたりしていない。

はあ……今度からドラコと寮の外で一緒にいるの辞めようかな……？

俺はそんなことを考えつつ、ドラコたちと歩いていると少し遠くにフレッドとジョージがいるのに気づいた。

「おーい！フレッド！ジョージ！！」

俺が双子に呼びかけると、二人はこちらに気づいて俺たちのところに近づいてきた。

ドラコはそれを見ると、顔を歪め

「シモン、先に行くぞ。」

と言って手下たちを連れて離れていった。

「「よつつシモン！！久しぶりだなー……君、入学した次の日からずっとサボってたんだって？」」

双子は見事に声を揃えて話かけてくる。

「ずっとじゃねーよ！一回は出たぜ。授業！！」

「いやいや、それはほとんどずっとだろ……」

「つーか、何してたんだ？君が病気とかあり得ないから、仮病だろ？」

「失礼な奴だな……俺だって人間なんだから病気になったりするぞ？」

俺がそう言うと、双子は顔を見合わせ

「君が人間だったなんて始めて知ったよ!!」

など、ふざけたことをぬかすので、一発ずつおみまいしてやった。

「そんで、何してたんだ？ずっと寝てたわけじゃないだろ？あのスネイプの授業で寝てたらしいからな。」

どうやら、俺がスネイプの授業で寝ていたことは有名になっているらしい……

「そんなのゲームに決まってるだよ？それ以外ありえんだろ。」

双子は揃って爆笑しだした。

「あははははっっ!!君ってやっぱ面白いね！授業にも行かずにゲームとかつっ」

そんなに面白いことなのか？

俺には、分からん……

「そっだ！相棒!!俺、良いこと思いついた！」

「相棒もかい？俺もなんだよ!!」

「シモン！俺たち“悪戯仕掛け人”の仲間にならないかい!？」

俺は驚いた。

俺はまだ、そこまで仲良くなったとは思っていなかったからだ。

「……………本気で言ってるのか？」

「もちろんさー！君となら面白いことができそうだしね！」「

たしかに、こいつらとなら面白いことができるかもな……………

ちょうど、ほとんどのゲームをやりきったところだし……………

「うーん……………たまにならそーいうのも良いかもな。」

「それじゃあ、決定！」「

こうして、俺は悪戯仕掛け人の一員になった。

それから俺たちは、悪戯の打ち合わせをする時間を決めてから別れた。

大広間に着くと、スリザリンの席にドラコたちがいない。

見渡してみると、ドラコとハリーが争っている。

近くにネビルがいることから、これは思い出し玉のシーンだろう……………

げっっ……

今日はあの飛行訓練の日かよ……

やっぱり今日もサボろう……

めんどくさい原作には関わりたくねーしな。

そんなことを考えていると、ドラコが手下たちをつれてこっちにや  
つて来た。

どうやら、争いは終わったらしい……

「シモン、悪いがここは非常に不愉快なのでね。先に行かせてもら  
うよ。」

ドラコはそれだけ俺に言うと、さっさと大広間から出ていった。

ふと顔を上げると、ハリーと目が合う。

「よっ！ハリー！……」

俺が声をかけると微妙そうな顔をされた。

やっぱり、スリザリンの名は、それだけでグリフィンドール生には  
マイナスのようだ。

「おい！ハリーあいつと知り合いかよ！？あいつはスリザリン家で  
スリザリン生だぜ？」

ハリーの隣にいたロンがハリーに問う。

ハリーは曖昧に

「う…うん……………」

とだけ答えていた。

「ひでーなあ……………ハリー、忘れたのかよー？」

俺はハリーが俺の名前などにより敬遠していることに気づきながらも、気づいていないふりをした。

やっぱり、英雄ハリー・ポッターと仲良くするのが一番印象が良くなるからな……………」

俺の打算的な考えに気づかないハリーは

「あついや、その……………覚えてるよ、シモン……………」

と戸惑いがちに応えた。

「なら良かった！隣にいるのは、フレッドとジョージの弟だよな……………俺はシモン！よろしくな！……………」

俺がそう言つと、ロンは目に見えて驚いていた。

「へっ！？……………僕はロン……………」

ロンは警戒しながらも、俺に名前を名のってくれた。

「よろしくな！ロン！！」

俺はロンの警戒を解かせるように、あの時スナイプに向けてした笑顔並のキラキラさを纏いながら言った。

「あっその……僕たちもう朝食食べたから行くね？」

俺は　ちつつ逃げられたか……

と思いつつ笑顔で

「ああ、またな！！」

と言った。

そう言った瞬間、ハリーたちはいそいそと大広間をあとにした。

ふう……………

まだ仲良くとはいかないか……

まあ良い。まだまだ時間はある。

少しずつ警戒を解かせていくか。

俺はスリザリンの席に戻り朝食を食べることにした。



## 6 グリフィンドール生（後書き）

今回は少し短めです……

すみません!!

しかも、あまり機械出てきてないし……

今回はグリフィンドール生との関わりをだしたかったのですが、微妙ですね……

## 7 材料の部屋（前書き）

10000ユニット達成！

皆さん本当にありがとうございます（>O>）／

## 7 材料の部屋

結局、俺はその後、授業を受けず、自室に戻った。

あのめんどくさい飛行訓練の場面に出くわしたくないからだ。

もちろん、あの場面に出てドラコと敵対すれば楽にグリフィンドール生の信頼を得られるだろう。

しかし、それはそれで後のドラコの対応がめんどくさくなるから却下だ。

よって、行かないのが一番なのである！！

だいたい、どの学年も授業が終わったところ、俺は待ち合わせの場所へと出かけた。

双子とリーとの待ち合わせである。

場所はグリフィンドール寮の前だ。

スリザリン生には肩身が狭い……

なんでも、話し合いをするための隠し部屋に案内してくれるそうだ。グリフィンドール寮の近くまで来ると、3人が待っているのが見えた。

「おーい！フレッド！ジョージ！リー！！！」

俺がそう叫ぶと3人は俺に気づき、俺の所まで走ってきた。

「よっ！ちよつと遅かったな！！」

「そーか？一応予定通りに、出たんだか……」

「『ああ、遅かったなね！俺たち、1分も待った！！』」

3人は息を揃えて言う。

「それは待ったに入らんだろーがっつ！！」

俺はそんな3人についついツッコんでしまった。

「『まあ、それは置いといて……早速行きますか！！俺たち悪戯仕掛け人の部屋へ！！』」

「おう！！」

俺たちは、悪戯仕掛け人の部屋へと向かった。

その部屋の行き方は凝っているようで、一回外に出てから隠しボタンを押し、中に戻り、合言葉を答えてからやっと隠し扉が出て来る。はつきりいってとてもめんどくさい。

しかし、中に入ってその意見は変わった。

いや、訂正。

そのめんどくさい作業を、する価値がある部屋だった。

部屋の壁は全て収納スペースがもうけられており、たくさんの様々な材料がしまつてあった。

それこそ、マグル製品の部品までなぜかある。

ここは、なにかを開発したり、実験したりするのに最適な部屋だ。

「なっ！良い部屋だろ！！俺たちはよくここで悪戯道具とか作ったりするんだ！！」

「しかもここは、必要の部屋みたいに望んだ材料が出てくる。とは言っても楽に手に入るもののみだけどな。」

「それでも、何かすぐに必要な時に手に入れられるって良いだろ！材料の部屋だから、材料の括りにはいる物しか出てこないけど。」

3人が凄いい笑顔で話しかけてくる。

「ああ、驚いたよ……………なんて素晴らしい部屋なんだ！！この部屋があれば、俺は…………俺は、簡単な機械なら作れる！！」  
そうなのだ。

俺は、屋敷にいた頃、簡単な作りの物なら作れた。

毎日のように機械いじりをしていたからな…………

しかし、ホグワーツでは、材料がない。

屋敷から持ってくるのにも限度がある。

よって俺は、ゲームのように完成された物を持つてくることにしたのだ。

だが、ここでは、材料が簡単に手に入る……………

マグル製品の部品は、魔法薬で使うような材料ほど貴重ではない。

つまり、ほとんどここで補充できるということだ!!

俺は目をキラキラさせて周りを見た。

ああ……………本当になんて素晴らしい部屋なんだ……………

「「「おい、シモン！戻ってこーい!!」「」」

ハッッ

俺は3人の言葉でやっと現状に戻ってきた。

危ない、危ない……………

あまりの幸せさに舞い上がっていたよ……………

俺たちは、それから、まだ気が早い気がするが、ハロウィンでの悪戯の計画を練った。

俺は、悪戯仕掛け人の中では参謀的な役割になるらしい。

まあ、妥当なところだろう。

俺は3人と学年を寮を違う。

よって、集まりにくいのだ。

なので、アドバイスをしたり、作戦を提案する参謀が良いのだろう。

気がつくと、もうすぐ夕食の時間だ。

俺たちは、次の会議の日程を決めたあと別れた。

俺がもう少しこの部屋にいたいと言ったからだ。

俺は、置いてある材料を見回す。

そこで、俺はピンっと思いついた。

俺はすぐさま必要な材料を集め、自室に帰ることにした。

部屋に帰り、必要な工具などをだしていると、ドラコが上機嫌に帰ってきた。

「聞いてくれ、シモン！ハリーポッターは今日でおしまいさ！今日  
夜の夜中ら奴は罫とも知らず、赤毛のうすのろと一緒にトロフィー  
室に来る！！そこで、きつとフィルチにつかまるのさ！あっはっは  
ー」

普通のドラコではありえないくらいのテンションの高さだ。

あの青白い顔でさえ、今は赤くなっている。

俺は、そーいえば、今晚かあー……

まあ、死なないんだし放置しててもいいな。

俺はハリーたちを放置することに決めた。

「そりゃあ、良かったな……つか、ドラコ、明日からまた、俺の飯ここまで運んでくれ。」

「！？また君は引きこもるのかいつっ！？やっと部屋から出たと思つたら、授業中にも出ないし……というか、なぜまた僕が君のご飯を運ばなければならぬいつっ？」

ドラコはさっきまでの上機嫌とは一変、凄じ苛立った顔をしている。

そんな顔したつて、意味ねーのになあー

ドラコは俺には敵わないからな！

「へーえ……いいんだ？俺が外でマグル製品の物を使っても……別に俺は良いんだぜ？こんな狭い部屋より大広間とかで使いたいしな！……」

そう俺がニヤニヤしながら言うと、ドラコの顔が歪んだ。

そして、悔しそうに

「わかった。」

と言った。

ついでに、俺は別にドラコのがキライなわけではない。

というか、俺の親しい人間トップだろう……

しかし、ついついいじりたくなってしまうのだ。

だって、そんなキャラだろ？

ドラコって!!!

俺はそれから、開発作業に打ち込んだ……

そして、一週間後……

「完成だっつ!!」

そう、ついに完成したのである。

「小型トランシーバー!!」

これは昔、一度だけ作ったことがある。

あの時は、まだ、俺が小さかったため、オモチャのような物しか作れなかったが、今回は違う!!

これを持っている者同士がこのホグワーツ内にいるならば、いつでも連絡をとることができる!!

これがあれば、悪戯仕掛け人の連絡も取れやすくなるはずだ!

しかも、形態はネクタイピン!!

これなら、身につけていてもおかしくないだろう。

あと、これはドラコにもあげよう。

あいつと連絡取れやすいのも助かるしな。

まあ、とりあえず、一週間まるまる徹夜だったので、取り敢えず寝ますが……………

俺は一週間ぶりの睡眠をとることにした。

## 7 材料の部屋（後書き）

ネクタイピン型トランシーバーのイメージは某探偵漫画の探偵バツジです 笑

次は何を開発しよーかなあー……

8 / 4 誤字修正、前書き修正

閑話 1 始まりの日（前書き）

まだ数日実家から帰らないので、短編入れることにしました！

さすがに更新しなすぎだと思ったので……

あと、珍しく、若干シリアスです（>人<；）

この閑話はあとあと重要になるので、なるべく読んでください！

## 閑話1 始まりの日

僕は、小さい頃からずっと一人だった。

正確には、一人ではないのかもしれない。

一応、叔父さん達一家がいるからだ。

でも、心はずっと一人ぼっちだった。

僕は何故か、生まれて数ヶ月で自我が生まれだした。

その結果、思考能力が人の数倍発達した。

だから、僕にはわかった。

叔父さん達は“僕”を見ているのではなく、“スリザリン家の嫡子”を見ていることを……

この世界には、“僕”を見てくれる人は、いないということ……

従兄弟と話していても感じる。

どこかよそよそしく、腫れ物を扱うような態度……

たぶん、親から“スリザリン家”とはなんたるか、どれくらい重要で、尊敬すべき家系なのかを刷り込まれているのだろう……

そのため、僕と関わる唯一の同年代の子供とも壁が生まれた。

僕は、この世界が辛かった……

だから、僕はこの狭い世界を飛びたした。

“スリザリン家”ではなく、“僕”を見てくれる人を探しに……

僕は、叔父に買ってもらったばかりの箒に乗って、空を飛んだ。

一人で箒に乗るのは初めてだ。

いつも誰かしらが、僕についていたからだ。

僕は取り敢えず、叔父さんに絶対に行つてはならないと言われていた場所に行くことにした。

なんでも、そこには“穢れた血”という生き物がいるらしい……

叔父さんは、

「穢れた血」には、関わってはいけない」

と、会うたびに、口を酸っぱくして言う。

まるで、僕にそれを刷り込むかのように……

でも、僕は今日、その言いつけを破る！！

その先に、新しい世界があると信じて……

しばらく空を飛ぶと、なんだか賑やかな街が見えてきた。

このまま、箒で街まで飛んで行ったら、たぶん凄く目立つだろう……

僕は、そう判断して、街の近くで箒から降りることにした。

箒は、森の中に隠しておく。

こんな箒をもって歩いていたら、目立つからだ。

街は凄く賑やかで驚いた。

こんな街は見たことがない……

僕は、別世界に来た気分になった。

ぐるぐるぐるぐる街を回る。

僕は、楽しくて、楽しくてしかたがなかった。

ふと、冷静になると、僕はあることに気づいた。

「……僕が筭をおいた森ってどこ……?」

僕は泣きたくなかった。

全く知らないこの町……

取り敢えず僕は、公園で休憩することにした。

もう夕方なので、人は少なかった。

僕は、ベンチに座る。

たぶん今、僕の周りは、暗いオーラが漂っているだろう……

「はあ……これからどうしよう……」

「ねえ、あなた。なにかなやんでいるの?」

ビクツとして、声がした方を見ると、一人の可愛い女の子がいた。

歳は、僕と同じくらいだろう……

「え!?!」

「あなたが、なにかなやんでいるみたいだから、はなしかけてみたの……もしかしたらちからになれるかもしれないから、はなしてみ  
て?」

第一印象は、歳のわりにしっかりと話した話し方をする子。

まあ、滑舌はたどたどしいけど。

たぶん、頭が良い子なのだろう。

僕は、少しの期待をかけ、話して見ることにした。

「へえー……つまりあなた、まいごなのね？」

……ぐさつときた……

僕は、人より大人びていると自分で思っていたからだ。

まあ、事実、迷子なのだけど……

「……そついうことだね……」

「じゃあ、わたしがあんないしてあげるわ！たぶん、あなたが、いつていたもり、わたししってるわ！……」

「！？本当？お願いします！……」

僕は、即答で答えた。

やっぱり、筈がないと困るからだ。

「ええ、いいわよ。わたし、ハーマイオニーっていうの。あなたは？」

「僕、シモン!!」

僕たちは、たくさん話をしながら、森へ向かった。

ついでに、“穢れた血”っていう生き物について聞いたけど、そんなものはいないって教えてもらった。

僕は、今までで一番幸せだった。

僕を“僕”として見てくれる子との会話……

凄く、凄く特別な時間だった。

ずっとこうしていたらいいって思うくらい……

でも、無情にもこの特別な時間は終わりを迎えた。

「ほら、シモン。あそこよ! もりがみえるでしょう? ……ここからひとりでもだいじょうぶ? わたし、もうかえらないといえないじかんなの……」

僕はもつとハーマイオニーといたかった。

でもそんな気持ちを必死で隠して、笑顔で

「うん! 大丈夫だよ!! ありがとう、ハーマイオニー!」  
と言った。

「ほんとうにじゅめんなさい……つぎは、もっとあなたとはなしたいわ……」

「！？また、君に会いに来てもいいの？」

「もちろんよ！だってわたしたちともだちじゃない！！」

ハーマイオニーはキラキラとした笑顔で言う。

何故か、僕の心臓がドクドクといつもより速く鼓動する。

もっとハーマイオニーの笑顔を見たいと思った……

「……これ、ハーマイオニーにあげる……今日のお礼。」

僕は、首にかけていたネックレスを渡した。

ずっと僕が持っていた物だ。

たぶん、父上か母上の形見なのだろう……

大切な物だけど、何故かハーマイオニーに持っていて欲しいと思っただんだ。

「ほんとう！？すっごくきれい……ありがとう、シモン！」

「う……うん……」

思わず見とれてしまった。

あまりに可愛い笑顔に……

「あっ！！じかんだわ！またね、シモン！！」

そう言っつて、ハーマイオニーは走って行ってしまった。

僕は、また会いに来ようと誓って森へと走った。

すると……

キキキキツツ……！！

ドーンッ

視界が真っ暗になる……

そして、だんだん見たことがない映像が流れ出した……

ああ、これは僕の、いや、俺の前世の記憶か……

全ての映像を見終わって目を覚ますと、そこは病室のようだった。

俺は、全てを理解し、部屋を飛びたした。

魔法界に住んでいる俺にはここでの戸籍がない。

つまり、逃げないと面倒なことになるからだ。

前世の記憶を思い出した俺は、機械に興味を引かれるようになった。

それを隠しもせずに生活しているうちに、マルフォイ家との微妙な壁もなくなり出した。

たぶん、マグル大好きな俺を、尊敬する一家とは別と考えるようになったからだと思う。

それからの生活はまあまあ楽しく過ごした。

その生活が、今世で一番幸せな時間の記憶と引き換えだったということに気づかずに……

閑話 1 始まりの日（後書き）

んー……

ハーマイオニーの言葉読みにくい……

最後の解説ですが、事故のショックで前世の記憶を思い出した代わりに、その直前の出来事、つまり、ハーマイオニーとの記憶を忘れてしまっているという事です……

## 8 トランシーバー（前書き）

更新遅くなってすみません（>人< ;）

もう少し頑張りたいと思います……

## 8 トランシーバー

外は日が登りだし、少しずつ明るくなっている。

キラキラとした朝日が光を注ぎ、澄んだ空気がこの清々しい朝を強調している。

しかし、その朝日が差し込まない地下の部屋……スリザリンの寮のある部屋はこんな清々しい朝だと言つのに、とても騒々しかった……

「おいっ！起きろ、ドラコ！……ついに……ついに完成したんだ！見るよ、ドラコ！……」

「くうー……すうー……」

ピキッ

ドッカーン！！

「！？！いったい何をするんだ！！痛いじゃないかっ　　というか、いきなり殴るな！」

「はっつ……俺が優しく起こしているうちに起きないお前が悪い！せっかく俺がこの完成品を見せてやろうとしているというのに……何故起きないんだ！？」

「そんな、理不尽な……」

ドラコは青白い顔を頬だけ真っ赤に腫らし、ありえない者を見るよ

うな目で俺を見てくる。

まあ、頬が真っ赤なのは俺が殴ったせいだが……

ドラコはしばらく俺のことをジト目で見たあと、溜息を一つついた。

「それで、僕をこんな時間に叩き起こした理由とは？」

「ジャツジャジャーン！これだぜ！！小型トランシーバー！！驚いたか、ドラコ！？」

俺は、ポケットに隠しておいた小型トランシーバーを取り出してドラコに見せる。

この美しいフォルム、この滑らかなボディ、そしてこの機能性！！

ああ、俺はなんて凄い物を開発してしまったのだろう……

「……………」 “こがたとらんシーバー” とはなんだ？どう見ても僕にはネクタイピンにしか見えないのだが……………」

「！？トランシーバーを知らないだって？……………ありえない……………一般人じゃない……………俺は認めん……………いいか！良く聞け！！この俺が説明してやる！トランシーバーとはな、無線電波によって、離れている人とも会話をすることができるようになる機械のことさ！！ネクタイピン型の物だから、ネクタイピンに見えて当たり前だ！！これは、特別にお前にあげよう！ドラコにはこの一週間たくさん働いてもらったからな……………」

俺は手に持っていた小型トランシーバーをドラコの手の上に置く。

ドラコにもトランシーバーをあげることにした理由は御礼だけではなく、その方が何かと好都合になることが多いことがもう一つの理由だ。

例えば、パシリとかに……

……ん？何か御礼よりもこっちの理由の方が大きいかも……？

「……機械だと？それは確か、君がいつもいつも言っているマグルの製品のことだよな……？こんなのはいらないぞー！」

ドラコは大きな声で叫び、俺がせっかくあげたトランシーバーを壁に投げつけた。

バギッッ

「おいっっ！テメエ、なめてんのか！？この俺様が一週間もかけて作ったトランシーバーをなに壊してんだ？どーしてくれるんだよ、ああん？」

俺が普段怒った時の数倍の眼力で睨むと、ドラコの顔色は青白いを通りこして紫色になった。

俺は少しずつドラコに迫って行く。

ついに、壁まで追い込むと、ドラコは土下座をしそうな勢いで謝りだした。

「すまない、シモン！マグルの製品だと知ってつい反射的に投げて

しまった……何でもする！！頼むから許してくれっ！！」

俺はニッコリと笑う。

ドラコは、俺の笑みを見て、警戒を緩めた。

その時……

「んじゃ、このトランシーバーを毎日ネクタイに着けるよ？そんで、俺がこのトランシーバーで連絡した時は、どんな状況でも出ること。簡単だろ？やるよな？」

俺はポケットから新しいトランシーバーを取り出してドラコに渡す。

「まつ待ってくれ！純血の僕がこんなマグルの製品を使うわけにはいかないだろう！！」

「……………お前、何でもするって言ったよな？」

俺はまたニッコリと笑ながら言う。

ドラコは、悔しそうな顔をしながらしぶしぶトランシーバーを受け取った。

「それじゃ、俺はもう一眠りするわ。おやすみー。」

「……………おやすみ。」

次に目を覚ますともう夕方だった。

俺は、寮から出てグリフィンドールの寮へと向かった。

双子達にこの小型トランシーバーを渡すためである。

グリフィンドール寮はやっぱりアウェイな雰囲気か漂っている。

早く出てこいよ、双子達………

そうは思っても中々出てこない。

まあ、突然の訪問だから仕方が無い。

しばらく待っていると、やっと双子達が出てきた。

「おーい！フレッド！ジョージ！リー！」

「おっ！シモンだ！お前また授業サボってるんだって？」

「噂だと、スネイプの奴、カンカンに怒ってるらしいぜ！」

「とうか、この一週間は何してたんだ？」

俺はポケットからトランシーバーを三つ出して三人に見せた。

三人は、これが何かわからないようで、頭の上にはなマークをだしている。

「ふっふっふっ！聞いて驚け！！これは、小型トランシーバー！俺は一週間ずつとこれを作ってたんだ！！」

最初は三人共トランシーバーが何かわからないようだったが、ジョージが気づいたようだ。

「あつ俺トランシーバーって知ってる！パパが言ってたよ。確か、遠くでも会話ができるようになる機械だよな？」

「ピーンポーン！正解！！範囲はホグワーツの中。その中ならいつでも自由に会話ができる！」

「「「おおっっ！！すっげえー！！」」」

そうそう、これだ。

俺が求めていたリアクションは。

全く、ドラコは頭でっかちだからなー……。

「これがあつたら、他寮の俺でも連絡がとりやすいだろ？」

「確かに！ナイスたぜ、シモン！！」

「しかも、これがあれば悪戯での連繋も取りやすくなる!!よしっ  
っ早速このトランシーバーを活用した悪戯を考えますか!!」

それから俺たちは材料の部屋に移動して話し合った。

「その案採用!!さすが我らが参謀殿!」

「そんで、それはいつするんだ?いつもの数倍手間がかかるけど…  
…」

「ハロウィンなんてどうだい!あと一ヶ月くらいだろう!!」

「よし!そうしよう!!」

俺はふと、ハロウィンという言葉に引っかかった。

何か、重大なことを忘れているような……

「参謀殿、どーしたんだ?ハロウィンじゃ何か不都合なことでもあ  
るか?」

「あついや、べつに。」

俺はそのつつかかりを無視して答えた。

まあ、忘れる程度のことだから大丈夫だろう……

「それじゃ、ハロウィンに決定!!取り敢えず、今日はここまでな。  
夕食の時間が終わっちゃう!急いで大広間に行くぞ!!」

「「「おう！！」」」

俺たちは、大広間へと急いで向かった。

## 8 トランシーバー（後書き）

なんだか、ドラコに対しての態度が悪化してきたような 汗

これでも一応、シモンはドラコを大事に思ってますよー！

……機械の次くらいに……

9 記憶なき再会（前書き）

体育祭……

早く終われーっっ

弱ヒツキーな私には、辛い毎日だ……

## 9 記憶なき再会

悪戯の準備が丁度整ったところ、ついに、悪戯決行の日“ハロウィン”がやってきた。

今日は久しぶりに授業をサボり、指定の位置に罾を仕掛ける。

ついでに、本当に久しぶりのサボりだ。

最近、先生達がとっても煩いからだ。

流石に自分でもサボりすぎたと思うが、ここまで煩く言わなくてもいいだろうってな具合まで……………

全く、なんでサボっちゃだめなんだ？

俺はとつても優秀だから、授業なんて受けなくても支障はないというのに……………

これだから、学校っていうのは嫌なんだ！！

そんなことを考えつつも、テキパキと作業を進めていく。

普段の悪戯よりも沢山罾を仕掛けるので、凄く時間がかかり、何時の間にかもう夕食の時間だった。

まあ、決行時刻は、皆が寮に帰る頃だから問題はない。

あと少しで終わる……

と思った時に、いきなりトランシーバーに通信が入る。

俺は受信ボタンを押し、通信に出る。

「はい、こちらシモン。いったいどうしたんだ？まだ、決行時刻じやねーだろ？」

『あつシモン！お前、今何処にいる！？』

リーの焦ったような声が響く。

「は？俺はスネイプの教室の近くだけど？」

『！？つまり、地下なんだな！？今すぐ逃げろ！今トロールが、地下に侵入しているらしい……危険だから、逃げるんだっ！』

！？

トロールだって？

そーいえば、そんなイベントあったな……

……………逃げるか。

「了解！んじゃ、今から逃げるわ！！」

『ああ！……』

プチっつ

トランシーバーの通信を切る。

そして、この場から逃げようと一步を踏み出した時、俺の頭に二つの案が浮かんだ。

……ここで、トロールからハーマイオニーを救ったら、一気に主人公組との接点が生まれるんじゃないか？

しかも、ドラコやスリザリン生達と敵対せずに……

トロールごときに、俺がやられるはずもねーし。

だって、この時期の主人公組にやられる程度の生物だぜ？

そうと決まったら、女子トイレに行きますか！！

俺はダッシュで女子トイレへと向かった。

女子トイレに着くと、どうやらまだトロールはここには来ていないらしく、ハーマイオニーの泣き声だけが辺りに響いていた。

「おい！そこにいる女の子！今、トロールが侵入しているらしいから早く逃げろ！」

ガタっつ

俺が大声で呼びかけると、トイレの個室から慌ててハーマイオニーが出て来た。

そーいえば、ハーマイオニーをちゃんと見るの初めてだな……………

と思いつつ、ハーマイオニーの顔を見ると、いきなり頭に激痛がはしる。

「!？」

激痛に耐えられず、頭を抑え、座り込むとハーマイオニーがこちらに走って来る。

「あなた、確かシモン・スリザリンよね？大丈夫なの！？急いで逃げないとトロールが来るかもしれないのでしょっつ！走れる？」

ハーマイオニーの顔、声、仕草……………

全てが懐かしく感じる……………

おかしい！俺は初めてハーマイオニーと話しているのに、何故こんなに懐かしいんだ！愛しいんだ！

俺はおかしくなっちゃったのか？

もしかして、何処かで会ったことがあるのか？

思い出そうとすると更に激痛がはしる……

あまりの痛みに意識が朦朧としてくる。

「ちょっと、大丈夫!？」

ハーマイオニーの声で顔を上げると視界の端っこに緑色の物体が映る。

!?!?トロールだ!!

トロールはこちらに気づき、持っていた棍棒を振り上げる。

その瞬間、俺は痛みにに耐えつつ、ハーマイオニーを突き飛ばし、己も後ろへバツクする。

ドーンっっ

……… 凄い威力だ。

振り下ろされた棍棒により、トイレの床に沢山のヒビがはいる。

……… さっきの一撃が人間に当たったら一発でお陀仏だな………

突き飛ばされたハーマイオニーはやっとトロールに気づいたらしい。

「キヤーーーーッッ!」

と叫び声をあげている。

すると、ハリーとロンが駆けつけて来た。

「こっちに引きつける!」

ハリーがロンに向かって叫び、トロールを自分たちに向けようとする。

すると、ハリー達に気づいたトロールは、標的をハリー達に変え、棍棒を振り上げて近づいていく。

「やーい、ウスノロ!」

反対側からロンが叫びながら、金属パイプをトロールに投げる。

それにより、トロールはハリーに背を向け、ロンを見る。

「早く、走れ、走るんだ!」

しかし、ハーマイオニーは恐怖のあまりに動けないようだ。

俺は頭の痛みに耐えられなくなり、目をつむる。

次に目を開けた時、もうトロールは倒れていた。

どうやら俺は、一瞬気絶していたようだ。

…………… かつこ悪いな、俺……………

ハーマイオニーが俺が気がついたことに気づいたらしく

「あつ、もう大丈夫？」

と声をかけてくる。

そこで俺は、頭痛が収まっていることに気がついた。

「ああ、平気さ。すまないな、こんな時に倒れて……………」

「仕方ないわよ。具合が悪かったのだから……………」

ハーマイオニーは笑顔でそう言う。

俺はその笑顔に少しドキリとさせられた。

俺が返事をしようとした時、トロールが起き上がろうとしているとここに気がついた。

「ステューピファイ!!」

赤い光がトロールに当たる。

ドーンっと音を立て、再びトロールが倒れる。

その音で、ハリー達はトロールが気がつき、そして、俺に倒されたという事に気がついた。

「君、そんな呪文が使えるなら、さっき使ってくれよ……………僕たち、

凄く苦勞して倒したんだからさ……」

ロンが少し、残念そうに言う。

なんだか、この機会により少し打ち解けることができたようだ。

予想外の出来事があったが、結果オーライということにしておこう。

「すまないな、さっきは頭痛が酷くてね、呪文が唱えられなかったんだ……」

俺がそう答えると、バタバタと足音が聞こえて来た。

大方、この騒動での物音により、教師達が気づいたのだろう。

マクゴナガルが飛び込み、その後にスネイプ、クィレルが続いて入ってくる。

「いったい全体あなた方はどういっつもりなんですか？」

マクゴナガルが冷静かつ怒りを込めて俺たちに問いかける。

「殺されなかったのは運がよかった。寮にいるべきあなた方がどうしてここにいるんですか？」

スネイプが俺とハリーを睨む。

どうやら、俺はハリー並とはいかずとも、スネイプに嫌われたらしい。

「マク・マクゴナガル先生、聞いて下さい!」

俺はハーマイオニーの声に被せて言う。

ハーマイオニーがこちらをジロリと見ているが、無視だ。

「先生方も知つての通り、僕は今日、具合が悪くて、授業を休みました。しかし、夕方には良くなってきたので、せめて、食事だけは皆と取るうと大広間に向かったのです……」

スナイプは胡散臭そうに俺を見る。

俺はその視線をスルーして続ける。

「ですが、その途中、急に具合が悪くなり、僕は倒れてしまいました……そこで、たまたま通りがかったMsグレンジャーが看病してくれたんです。そこに、さっきのトロールが現れ僕たちに襲いかかってきました!僕たちは必死で逃げたんです!しかし、ついに、追い込められ、この女子トイレへ……もうダメだ!!!って思った時に颯爽と現れ、僕たちを助けてくれたのがMrポッターとMrウィーズリーです!どうやら、大広間にMsグレンジャーがいないことに気がつき、駆けつけてくれたようです!」

ハーマイオニーとハリーとロンがあんぐりとした顔でこちらを見る。

俺の演技力に驚いているのだろう……

「もし、三人がいなかったら、僕、今頃死んでました。」

俺は涙目になりながら、マクゴナガルに訴える。

スネイプにはこの攻撃は効かないだろうが、マクゴナガルには効くだろう……

「分かりました……では、Msグレンジャー、Mrポッター、Mrウィーズリーの勇気と友情と運をたたえ、グリフィンドールに30点あげましょう。ダンブルドア先生にご報告しておきます。帰ってよろしい。」

教師達は去っていく。

もちろん、スネイプは俺を凄く睨んできた。

それはもう、視線だけで人が殺せるくらいの威力で……

ハリーとハーマイオニーとロンは俺に好意的な視線を送ってくる。

まあ、俺のおかげで、怒られず、それどころか、30点も手に入れたのだから当たり前だろう。

……ポイント稼ぎ成功だ……

俺は密かにそう思った。



## 9 記憶なき再会（後書き）

主人公、この小説で初めて魔法使いました！

ハリポタ小説でここまで、魔法を使う場面が出てこないのは珍しい  
ですよ 笑

しかも、久しぶりの原作軸……

10 裏工作（前書き）

.....

私、只今、瀕死状態です.....

体育祭なんて嫌いだーっっ

## 10 裏工作

主人公組とまんまと仲良くなってから数週間が経った。

今日は、皆どこことなく騒がしい。

まるで、何か凄いイベントがある日のように。

そう、今日はクィディッチの試合なのだ！！

試合は、「グリフィンドールVSスリザリン」

つまり、ハリーの初試合である。

ついでに、原作場面でもある。

俺はポイント稼ぎのために、ハリーの応援をしに行くと思うだろう？

しかし、今回はするつもりはない。

もちろん、ハリー達に誘われなかったわけではない。

誘われたが、断ったのだ。

だからと言って、スリザリンの応援をするつもりもない。

つまり、クィディッチの試合を見に行くつもりがないのだ。

それには、もちろん、理由がある。

クイディッチの試合の日が校内にいる生徒が一番減る日だからだ。  
誰にもバレずにしたいことが俺にはあるのだ。

俺は、前回の事件で原作を忘れていたことを後悔した。

前は、結果オーライだったが、毎度毎度それは通用しない。

だから、一度冷静に、原作について考えてみた。

その結果、重要なことを思い出したのだ。

……………秘密の部屋の話……………

あれって、確か、スリザリンの後継者が犯人ということだ。最初話が  
進んで行った。

しかし、スリザリンの後継者が明確に分かっていなかったために、  
パーセルマウスのハリーが周りに疑われたすといようなストーリー  
だった。

つまりだ。

この世界では、“スリザリン”の名を持つ俺が一番に疑われるとい  
うことだ。

そうなる、俺がせっかく稼いだ友好ポイントが失われてしまう。

例え、真犯人が分かったとしても一度失われた友好ポイントを完璧

に取り戻すのは難かしい。

何故かって？

一度、間が空くと、「あいつってやっぱり、スリザリン生だよな。関わりにくい……」

という意識が芽生えるからだ。

ハリーやハーマイオニーになくても、ロンには芽生えるだろう。

それを回避するため、俺は、秘密の部屋の話を原作ブレイクすることにした！

つまり、やりたいことというのは、秘密の部屋に潜り込み、バジリスクをどうにかすることだ。

俺は、生徒達がクイディツチの試合のために校舎から出て行くのを確認したあと、ダッシュで例の女子トイレへと向かう。

ここで見られたら面倒なことになるからだ。

女子トイレの中に入ると、グスグスという泣き声が奥のトイレの個室から聞こえる。

都合が良いことに、最大の難関“嘆きのマートル”は、個室に引きこもってくれているようだ。

俺は、すぐに手洗い場に行き、蛇の模様が入った蛇口を探す。

これは、あつという間に見つかった。

俺は、マートルに聞こえないように小さな声で

《開け》

とパーセルマウスで言う。

すると、すぐに地下への扉が開いた。

俺はその中に入る。

ジメジメとしていてとても気持ちが悪い……

先へと進んで行くと、とても大きな扉があった。

俺はもう一度

《開け》

とパーセルマウスで言う。

ゴゴゴゴッ

と音を立てて扉が開いた。

中には、大きな蛇……いや、バジリスクが眠っていた。

俺はバジリスクに近づいてみる。

《起きろ、バジリスク》

声をかけてみるが、ビクともしない。

《俺は、スリザリンの末裔だ。俺の頼みを聞いてくれないか？》

……………反応なし……………

おかしいな……………

ここまで、反応がないなんて……………

調べてみるか……………

俺は、調べるためにバジリスクに手を伸ばす。

しかし、バジリスクに触れた瞬間

ビリリッ

という痛みが身体を襲った。

そして、俺は理解した……………

「……………くそっつ！ヴォルデモートの奴め、こいつに呪いをかけてやがる！たぶん、自分以外のスリザリンの子孫の命令を聞かせないために！せっかく、ここまで来たというのに……………」

つつい俺は、大声で怒鳴ってしまった。

こんな怒鳴り声をあげてもバジリスクが目を覚まさないということ  
は、これはもう決定的だろう。

「ふっ……あははは！この俺の計画を邪魔するなんて！……  
絶対にヴォルデモートの思惑通りには進ませねえ！！」

俺はポケットの中から発信機を取り出すとバジリスクに取り付けた。

絶対に取れないような位置に。

「俺の計画の邪魔をした罪はきっちり、払ってもらってからな……」

俺はそう一言最後に呟き、秘密の部屋をあとにした。

寮に帰ると、ちょうど試合が終わったらしく生徒達がどんどん帰っ  
てきた。

スリザリン生の雰囲気はとても重い……………

つまり、原作通りグリフィンドールに負けたのだろう。

部屋に戻ると、ドラコが荒れていた。

そして、俺が部屋に入って来たのに気がつく、永遠と

「ポッターが！ポッターが！」

と叫び続ける。

はっきり言って、うざい。

どんなに、ハリーが好きなんだ……………ドラコ……………

って言いたくなるくらい言い続ける。

我慢の限界に達したので、ドラコの頭を殴る。

すると、見事にドラコのポッターコールは止まった。

まあ、うめき声はするが……………

「何をするんだ、いきなり！」

「ポッター、ポッターうるせえんだよ！今お前何回ポッターって言ったと思ってる？30回だぞ！お前、本当はハリーが好きだろ！毎日毎日ポッター、ポッター……………お前は恋してる乙女か！？」

……そうなのである。

ドラコは同室になってから、毎日ポッター、ポッター言っている。聞かない日はないというくらいに……

これはもう、病気だろ……

てか、よく今まで俺は耐えてきたな……

まあ、今までもたびたび爆発した気もするが……

「なんて、おぞましいことを君は言うんだ！ やめてくれ……吐き気がする………だいたい、それはポッターが「はい、31回目。」………」

ドラコはふて寝をしましてしまった。

そんなに嫌なら口にするなよ、あほ……

俺はそう思いつつ、バジリスクに仕掛けた発信機のチェックを開始した。



10 裏工作（後書き）

なんか、グダグダな文章……………

後日書き直すかもです……………

11 クリスマス休暇（前書き）

ついに悪夢の体育祭終わりました！

よく耐えることができたな、自分………

## 11 クリスマス休暇

あの試合の日から何週間かたった。

冬も本格的になり、凄く寒い毎日だ。

特に最悪なのは、スネイプの地下教室……

あそこは、地下でとても寒いというのに、防寒対策をろくにしていない。

本当にありえない場所だ。

あんな寒い場所、人間が行く場所じゃない!!

そう考えた俺は、再び授業をサボり始めた。

もちろん、教師達には散々注意された。

しかし、考えてみてくれ。

生徒が

「僕、本当に具合が悪いんです……………」

などと言っていたら、教師として、生徒の言うことを信じるしかない。

たとえば、どんなに怪しくてもだ。

真実薬などを使うなんてもってのほかだ。

そんな薬を生徒のサボりの真実を暴くためだけに使ったなんて世間に知られたら大問題だ。

その上俺は、保護者であるルシウスに「シモン・スリザリンは身体が弱い」というような内容の手紙を校長宛に出させた。

もちろん、ルシウスを脅してだ。

つまり、学校側としては、俺がどんなにサボっても手だしすることは、注意ぐらいしか無理なのだ。

よって、俺はここ最近、教師達の注意をスルーしながら部屋に引きこもっているのだ。

そんなことをしているうちに、とうとうクリスマス休暇になった。

俺はウキウキと自分の屋敷へと帰るため、汽車に乗り込んだ。

家にいる方が色々な機械製品があって幸せだからだ。

空いているコンパートメントを探していると、ちょうどまだ誰もいないコンパートメントを発見した。

そのコンパートメントに入り、バッグからゲームを取り出す。

もう、入学前に買ったゲームはほとんど全クリしてしまった。

あとの残りは、このゲームの裏ステージだけだ。

俺は集中してゲームに取り組む。

もう俺にはゲームの世界しか見えていない!!

と思っていると

「あ!私このゲーム知ってるわ!面白いけど、とっても難しいって評判のゲームでしょ。」

といきなり話しかけられた。

驚いて顔を上げると、そこにはハーマイオニーの顔のアップがあった。

思わず俺は、横へ飛び退いてしまう。

「あっ、ごめんなさい。一応、声をかけたのだけど、貴方がゲームに集中していて……つい入っちゃったの……」

「あっああ、そうなのか。まあ、座れよ。」

ハーマイオニーの顔をアップで見たせいか、俺の心臓がバクバクいう。

そういえば、ハーマイオニーと二人つきりになるのは、あのハロウ

インの日以来だ。

あの日からハーマイオニーとは何回か話したが、いつもハリーとロ  
ンが一緒だったからだ。

その度、不思議な胸の違和感を感じたがここまでではなかった。

落ち着け、俺……………

顔をアップで見たからこんなにドキドキするんだ……………

落ち着けば治まるはずだ。

俺は目を閉じ、深呼吸を一回する。

目を開けもう一度ハーマイオニーの顔を見る。

するとまた、心臓がバクバクいいだす……………

なぜ！なぜなんだ！？

ハーマイオニーは、ただの原作キャラだぞ！

なのに、なぜこんなに胸がドキドキするんだ？

これじゃあ、まるで、俺がハーマイオニーに恋してるみたいだ……………

いや、そんなはずがない！

ハーマイオニーの顔は前世である程度知っていたのだから、一目惚

れない！

接点だってそんなになかったのだから！

その上、ハーマイオニーはたしか最終的にロンとくっつく……

しかも、ハーマイオニーはけっこう前からロンのことが好きだったみたいだった。

今、ハーマイオニーがロンのことを好きかどうか知らないが、そうなるって知っている相手を好きになるはずがないじゃないか！！

「シモンどうしたの？さつきから一言も喋らないけど……私の話聞いているかしら？」

「えっっ！？ああ、ごめん。すこしボーツとしてたよ。すまないが、もう一度話してくれないか？」

俺は、色々と考えている間にゲームオーバーになったゲームの電源を切る。

どうせ、こんな心理状態じゃ、裏ステージはクリアできないからな。

「今度はちゃんと聞いてよ……ニコラス・フラメルって貴方知ってる？」

ああ、そんな話あったな……

さて、俺はどう答えるべきか……

もちろん、俺はニコラス・フラメルのことを知っているが、此処で話すべきなのか？

まあ、話さなくたってどうせ知るんだし、話さなくていいか。

しかも、あれだろ。

この時期ってたしかハリーはみぞの鏡にハマる時期だ。

つまり、ここで教えちゃうと、それが変わってしまう。

原作なんてどうでもいいが、あのうざいヴォルデモートの思い通りにさせたくないし、話さないのが一番だな。

「すまないが、知らないな。」

「そう………何か分かったら教えてちょうだい。」

ハーマイオニーが少し残念そうな表情で言う。

その少し、憂いた表情にまたドキリとさせられた。

ああもう！

いったいどーしたんだよ、俺！！

早く落ち着け！

落ち着くんだ、俺！！

「ねえ、本当に大丈夫？熱あるんじゃないの？顔赤いけど……」

ハーマイオニーの白くて綺麗な手が俺の額に触る。

それだけで、俺はさらに顔を赤くした。

「熱はそんなになさそうだけど……そんなに顔を赤くするってことは、具合が悪いのね……駅に着くまで寝とく？私、着いたら起すけど。」

俺は首を縦に何度も振った。

こんな心理状態でハーマイオニーと会話なんて無理だからだ。

俺は荷物をどけて横になる。

しかし、硬い椅子なので凄く寝にくい……

「寝にくそうね……そうだ！私が膝枕してあげるわ！」

「へっっ！？いや、いいよ！迷惑だし！！」

俺は大慌てで断った。

そんなことしたら、心臓が破裂する……！

「具合が悪いのだから、遠慮しないで！早く横になりなさい……！」

待って下さいよ……

ハーマイオニーさん……

俺、逆に死んじゃいますよ……

「もう！早くしなさい！！」

そう言つてハーマイオニーは、無理やり俺を膝の上に横にさせた。

「さあ、寝なさい。ちゃんと起こすから安心して寝てね。」

いや、無理ですよ……

こんなに心臓がバクバクいつてるのに寝れません……

俺は必死で寝たふりをした。

すると、ハーマイオニーが優しく俺の髪をすく。

また、ドキリとした。

そして、俺は気づいた……

俺はこのハーマイオニーの行動にドキドキさせられつつも、心に暖かい何か溢れてきていることに……

ああ、認めたくないな……

でも、これは確定だな……

俺がハーマイオニーに恋しているってことは……

何がきつかけなのかは分からない。

でも、どうしようもなく、彼女が愛しいんだ……

11 クリスマス休暇（後書き）

なんか、予定以上にラブ度高いです……

どうなる！シモン君の恋は！？

## 12 クリスマスパーティー前（前書き）

総合評価2000突破ありがとうございます！

こんなにたくさんの人にこの小説を評価してもらえ、  
本当に嬉しいです（＾Ｏ＾）ノ

## 12 クリスマスパーティー前

あれから、俺はどうやってこの屋敷まで帰って来れたのか覚えていない……………

汽車でハーマイオニーと過ごしたあと意識を正常にたもてなかったせいだ。

はあ……………

自覚したとたんこれかよ……………

流石にこれはまずいよな……………

ハーマイオニーと会う度これじゃあ、主人公組とうまく関わって行くのが難しくなる。

まずは、耐性をつけなきゃな。

俺はそう考えをまとめると、もう一度寝直すことにした。

せっかくのクリスマス休暇なんだ。

ダラダラしなくてどーする!!

布団をかぶり目をつむる。

良い感じに眠気が襲って来たその時……………

バーンっつ

「ちっ！人がせつかく良い気持ちで寝ようとしてるって言うのに、  
いったい誰だよ！」

音の発信源は多分、談話室……………

つまり、誰かが訪ねに来たということだ。

俺は、無理やり起こされたことに対しての怒りを隠せないまま、談話室へと向かう。

そこには、見慣れた将来絶対にハゲると思われる頭があった。

「おい、ドラコ！いったいどーいうつもりだ！せつかく俺様が良い気持ちで寝ていたというのに！」

「！？君、まだ寝ていたのかい！？もうとっくに昼は過ぎてるぞ！しかも、僕がここに来たのは、君が約束の時刻に僕の屋敷に来ないからじゃないか！！」

時計を見てみると、時刻は午後3時……………

あー……………

そういえば、そんなことも言っていた気がしてきた……………

「……………んで、何の用事だったっけ？」

「そのことまで忘れたのかい！？ああもう……………今日は一緒に今度

僕の屋敷でやるクリスマスパーティーで着るドレスローブをオーダーメイドするのだろう……」

ドラコは手を額にあてながら、呆れたように言う。

「というか、ちょっと待て！」

「俺、クリスマスパーティーなんて出るつもりねーぞ？」

「そんなこと、許されるわけがないだろ！君はあのスリザリン家の当主なんだぞ！純血の家系が集まるこのパーティーに出席しないなんて、認められるはずがないだろうー！！」

はい、でたー……

ドラコお得意の“スリザリン家”と“純血”……

まじで、鬱陶しい……

「んなこと言っただって、ホグワーツ入学前は数える程しか出てないじゃん。今更出なくなっただって問題ねーよ。」

「そ・れ・は！君のマグル好きが周りにばれないように、君がとても病弱でパーティーなどの公の場に出られる状態じゃないっていうことにしていたんだ！だが、今はホグワーツに通っているのだから、それは通用しないんだ！」

ドラコは顔を真っ赤にして俺の言葉に反論する。

「というか、俺、昔から病弱設定だったんだな！」

本当に風邪なんて引いたことないのに！

面白ー！！

「いーじゃん。突き通せよ、その病弱設定でさ！ホグワーツでもやっつてんだし！」

「君というやつは……………！君がパーティーに出ないだけで、どれだけマルフォイ家が苦勞してきたと思っっているんだ！今度という今度は絶対に出てもらっからな！！」

そう言っつてドラコは俺の首元を掴み暖炉へと引きずっていく。

……………こんなにキレルドラコ久しぶりだな……………

これは抵抗しない方が身のためか？

いや、あんな糞パーティーなんて出たくねえ……………

まあ、今日はドレスローブだけだし、行ってもいいか。

当日にエスケープすれば問題無し！！

「あー……………待て待て！自分で歩く！行けばいいんだろ！マルフォイ邸にー！！」

「！？やっと分かってくれたのか！さあ、行こうじゃないか！父上と母上が首を長くして待っているはずだ！」

ドラコは輝かしい笑顔を浮かべながら言う。

あはははは！

俺、クリスマスパーティーに出るなんて、一言も言ってるのに！  
罪悪感？

そんなの、ドラコに対しては今更だろ？

ドラコは俺が黒い笑みを浮かべていることに気がつかないまま暖炉へ行き、フルーパウダーを一掴み取り

「マルフォイ邸！！」

と叫ぶ。

俺も後に続き、フルーパウダーを一掴み取って

「マルフォイ邸！！」

と叫んだ。

すると、みるみる景色が変わり、あっという間にマルフォイ邸に着いた。

……………何度やっても慣れない浮遊感だ……………

「やっと来てくれたのかい、シモン？」

ルシウスが俺に話しかけてくる。

ん？……………なんか、前見た時より、ハゲが進行してるぞ？

そんなことを思っていることを綺麗に隠しつつ

「すみません……………約束を忘れてしまつて……………」

と謝っておく。

「……………素晴らしい棒読みだな……………」

ありゃ？棒読みになつてたか？

「そんなことないですよ！」

俺はすぐさまキラキラの笑顔で誤魔化す。

しかし、流石は俺を幼少の頃から見てきたマルフォイ家……………

こんなことでは誤魔化されなかつたようで、3人一斉にため息をついた。

「……………そんなことより、早く応接間に行きましょう。業者さんが待ってるわ。」

ナルシッサの言葉に全員従い、俺たちは応接間へと向かった。

応接間にいたのは、マルフォイ家御用達の仕立て屋。

俺も何度かお世話になっている。

「おお！これは、スリザリン様！！この度のパーティーにはご出席なさるのですね！我らが敬愛すべきスリザリン家のご当主様のお身体の調子が、悪いとの噂をお聞きし、心配していたのです……………」

うーむ……………」

ここまで噂になっているのか……………」

まあ、その方が都合が良いがな！

なんて思っていると

「ああ、そうなんだ。シモンは最近調子が良くなってね……………パーティーに参加してくれるんだ！」

などと、かつてにドラコが受け答えをする。

俺は出るつもりなんてねーのにな……………」

「それはそれは、よろしゅうございました！では、この私、久しぶりのスリザリン家のご当主様の晴舞台のドレスローブ……………全力で作らせていただきます！」

そう言って、仕立て屋はテキパキと俺たちの採寸を進めていく。

流石はマルフォイ御用達の仕立て屋……

仕事が早い……

あつというまに採寸は終わり、あとはデザインのみだ。

これは、ドラコにまかせた。

どうせ、出ないつもりパーティーのドレスローブ……

どんなのだっていいしな。

それに、ドラコって意外とセンスいいし。

全てが終わった頃にはもう夕方だった。

マルフォイ家の方々にディナーに誘われたが、俺は丁重に断ってさつさと自分の屋敷へと帰った。

なんか、色々疲れたからな。

俺は屋敷に着くと、シャワーを浴び、就寝準備をしてさつさと寝ることにした。



12 クリスマスパーティー前（後書き）

なんだか、ダラダラした文章……

ああ！

文才が欲しい！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2482v/>

---

機械オタク、魔法界に参上！

2011年9月16日08時32分発行